

## 明和町と『伊勢物語』

『伊勢物語』は、主人公の「ある昔男」の人生を描いた歌物語です。

主人公のモデルは、平安時代の貴族である在原業平<sup>ありはらのなりひら</sup>だとされています。業平は天皇の血を引く高貴な生まれで、眉目秀麗<sup>よくしづなり</sup>で和歌の名人でした。

明和町との関わりに注目すると、物語の六九段「狩の使」は斎宮が舞台です。

男が天皇から「狩の使」に任命されて斎宮を訪れ、斎王と一夜を過ごす物語で、『伊勢物語』を代表するストーリーです。



『伊勢物語』写本 斎宮歴史博物館所蔵

### < 69 段 狩の使のあらすじ >

男は、狩の使として伊勢斎宮を訪れました。斎王は、母親から「この方は、いつもの使いよりも丁寧にもてなさない」と言われていたため、朝には出かける世話を送り出し、夜には自分の御殿に招いてねざらいました。

2日目の子<sup>こ</sup>の一刻（午前0時頃）、月の光がおぼろげな中、斎王は召使<sup>めいし</sup>の童女を先に歩かせて、男の寝所を訪れました。2人は丑<sup>うし</sup>の三刻（午前3時頃）まで共に過ごしましたが、まだ満足に語らうこともないままに、斎王は帰ってしまいました。

男が悲しんで寝られないまま夜を明かしていると、斎王から歌が届きました。

君や来し我や行きけむおもほえず夢かうつつか寝てかさめてか

（あなたが来たのか、それとも私から行ったのか、よくわかりません。あれは夢だったのでしょうか、それとも現実だったのでしょうか。眠っていたのでしょうか、目覚めていたのでしょうか）

斎王の歌は、昨夜の出来事を不確かなものと言い、まるで無かったことのようにするような、頼りないものでした。男は泣きながら返歌を詠みます。

かきくらす心の闇にまどひにき夢うつつとはこよひ定めよ

(涙に目もくれ、心も闇に迷うような状態で、何もわかりません。あれが夢だったのか、現実のことだったのかは、今夜確かめてください。)

その日、狩りに出ても、男はうわの空のままでした。今晚だけでも会いたいと早いうちから思っていると、狩の使が都から来ていると聞いて、斎宮頭を兼ねた伊勢国司が、夜通し宴会を開いてしまいました。男は明日には尾張国に出発しなければならなかったで、もう斎王に会うことはできません。男は悲しみにくれました。

明け方、斎王は盃の杯の皿に、歌を書いて差し出しました。そこには、

かち人の渡れど濡れぬえにしあれば

(徒歩の人が渡っても濡れない程度の浅い入江。そんなに浅いご縁ですから。)

とあって、下の句はありません。男は、松明の燃え残りの炭を使って、下の句を書き足します。

また逢坂の関は越えなむ

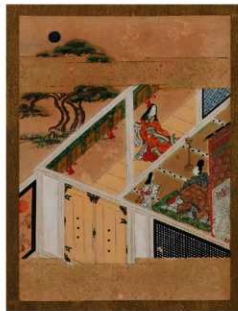
(もう一度逢坂の関を越えて、伊勢まで会いに参りましょう)

そして、夜が明けると尾張国へ旅立ちました。

\*物語の要約は「斎宮ガイドブック」(斎宮歴史博物館発行)から引用しました。

物語の本文の最後には、後の世の人の書き足しがあり、物語に登場する斎王は、実在した斎王の恬子内親王(文徳天皇の娘)であると紹介しています。

大淀には、物語にちなんだ業平と斎王が業平松の木の下で別れの歌を詠みかわしたと伝わっており、現在は三代目の業平松が地域のシンボルになっています。



いせものがたりずししはりまぜびやうぶ  
『伊勢物語図色紙貼交屏風』  
斎宮歴史博物館所蔵

## <『伊勢物語』69段「狩の使」 原文>

むかし、男ありけり。その男、伊勢の国に、狩の使にいきけるに、かの伊勢の斎宮なりける人の親、「つねの使よりは、この人よくいたはれ」といひやれりければ、親のことなりければ、いとねむごろにいたはりけり。朝には狩にいだしたててやり、夕さはかへりつつ、そこに来させけり。かくて、ねむごろにいたつきけり。二日といふ夜、男、われて「あはむ」といふ。女もはた、いとあはじとも思へらず。されど、人目しげければ、えあはず。使ざねとある人なれば、遠くも宿さず。女のねや近くありければ、女、人をしづめて、子一つばかりに、男のもとに來たりけり。男はた、寝られざりければ、外の方を見いだしてふせるに、月のおぼろなるに、小さき童をさきに立てて人立てり。男、いとうれしくて、わが寝る所に率て入りて、子一つより丑三つまであるに、まだ何ごとも語らはぬにかへりにけり。男、いとなしく、寝ずなりにけり。つとめて、いぶかしけれど、わが人をやるべきにしあらねば、いと心もとなくて待ちをれば、明けはなれてしばしあるに、女のもとより、詞はなくて、

君や来しわれやゆきけむおもほえず 夢かうつつか寝てかさめてか

男、いという泣きてよめる、

かきくらす心のやみにまどひにき 夢うつつとは今宵さだめよ

とよみてやりて、狩に出でぬ。

野に歩りけど、心はそらにて、今宵だに人しづめて、いととくあはむと思ふに、国の守、斎の宮の頭かけたる、狩の使ありと聞きて、夜ひと夜、酒飲みしければ、もはらあひごともしえせで、明けば尾張の国へたちなむとすれば、男も人しれず血の涙を流せども、えあはず。夜やうやう明けなむとするほどに、女がたよりいだす盃のさらに、歌を書きていだしたり。取りて見れば、

かち人の 渡れど滞れぬ えにしあれば

と書いて末はなし。その盃のさらに続松の炭して、歌の末を書きつく。

またあふ坂の 関は越えなむ

とて、明くれば尾張に国へこえにけり。

斎宮は水の尾の御時、文徳天皇の御娘、惟喬の親王の妹。

『新編日本古典文学全集 12』より



『伊勢物語図屏風』(第69段狩の使・第71段神の斎垣ほか)  
斎宮歴史博物館所蔵

キーワード：文学、伊勢物語、在原業平、恬子内親王、斎王、斎宮、大淀、業平松